

# 甲賀市の文化財②③

## 甲賀和田谷の戦国時代



▲公方屋敷跡(甲賀市甲賀町和田)

永禄8年(1565)、三好三人衆・松永久秀らの軍勢は室町第13代將軍義輝の二条御所を包圍し、義輝は自刃。この事件以降、甲賀和田谷は、大きな歴史の表舞台にたつこととなります。

義輝の弟覚慶(後の足利義昭)も奈良興福寺一乗院に幽閉されたものの細川藤孝、和田惟政ら幕府近習の手引きによって脱出し、甲賀和田谷にある和田惟政の館(公方屋敷)に迎え入れられることになるのです。

この時、和田惟政が果たした役割がいかに大きかったかをうかがう史料は、京都府歴史資料館が収集した和田惟政関係文書10通の中に見ることができません。

うち5通は、覚慶から惟政に充てた文書で、両者の親密な関係がうかがえます。惟政は幕府奉公衆であるとともに、甲賀衆の一人として六角氏との関係を深めており、覚慶の一乗院脱出、覚慶の將軍擁立に大きな働きを行っていることがわかります。

和田館へ迎え入れた惟政は、おそらく和田谷の軍備を整える一方、支持勢力の糾合を進めるため各地の諸大名に書状を送り、支援要請に慌しく動いていたことでしょう。残りの書状5通は、覚慶方からの支援要請に対する返書です。書状が惟政宛であるというのは、

和田館の主であり、覚慶の警護にあたることも側近的なきわめて重要なポストにあったことが公的に認められていたことを示すものです。

和田館へ来てから約4か月後に覚慶は突如、守山の矢島に移動します。

この時、惟政は尾張にあって覚慶擁立を果たすべく織田信長との交渉にあたり、惟政の留守中に矢島へ移動したことが知られます。

覚慶は惟政の交渉によって得られた大きな後ろ盾織田信長という武将に導かれて上洛を果たし、室町幕府最後となる第15代將軍「義昭」となります。

惟政は覚慶の將軍擁立に向けて、一躍、歴史の表舞台に登場し、そして歴史の中に足跡を残しているのです。

問い合わせ  
歴史文化財課  
調査管理係  
TEL 86-8026  
FAX 86-8216

## 地

中に埋もれた遺跡や遺物から歴史を明らかにする考古学は、書きのこされたものが少ない古代史の解明にはとくに力を発揮しますが、考古学から見た甲賀市は近江のなかでもまだまだ謎の多い地域です。

1万3千年も前の縄文時代草創期の石器や早期の土器、弥生時代の土器など注目される出土品がありますが、発掘例が少ないこともあり、住居や村の跡は未確認です。



▲野洲川をのぞむ山あい  
に大古墳群が眠る

# 市史の小径

第21回

## 古墳に学ぶ 甲賀谷の開発

しかし、これに続く古墳時代の中ごろ(5世紀)からは、急激に遺跡が増加し、人々が甲賀谷を本格的に開発し始めたことがわかります。

なかでも野洲川に面した水口盆地には、大型倉庫群と多数の住居の跡が発見されて話題となった植遺跡や、一帯の首長の墓とされる泉古墳群などがあり、交通路を押さえる、野洲川上流域の政治と暮らしの中心が形成されていたようです。

昨年度実施した市史の調査では、湖南市の三雲から水口町牛飼にかけての山あい、300基におよぶ大古墳群が改めて確認され、死者を葬った横穴式石室の形から、水口盆地には様々な社会的基盤を持つ人々が集まり住んでいたことがわかってきました。甲賀市史第1巻ではようやく見えてきた甲賀谷の古墳時代について、詳しく紹介していきます。

問い合わせ 歴史文化財課 市史編さん室  
TEL 86-8075 FAX 86-8216